

Hello World

共生の
芸術祭

文化芸術を媒介として共生社会の実現をめざす、共生の芸術祭。今年度は、多様な表現や環境から生み出される作品との“出会い”に焦点を当て、テーマを「Hello World」としました。私たちが今まで見てきた世界を新しく捉え直し、受け入れ、そして共に生きることかけとなれば幸いです。会場も3カ所に広げ、スケールアップして開催します。ぜひお気軽に足をお運びください。

EXHIBITION

Exhibition 1 Hello World

会期：2018年 2/2 (金)～2/4 (日)
時間：10:00～21:00 (※最終日2月4日(日)は19:00まで)
会場：イオンモール京都桂川「竹の広場」

「Hello World」をテーマに、私たちの見ているこの世界の認識を新しくしてくれるような作家の展覧会を開催します。日々繰り返し描かれる大量のドローイング、道端に落ちているものを集めて作られる小さなオブジェ、言葉の綴られた自作のおみくじを用いたパフォーマンスなどの作品を通じて、私たちがこの世界と出会った時の感覚を思い出してくれるような多様な表現を紹介します。

Exhibition 2 虹の上をとぶ船

～八戸から届く版画の世界・坂本小九郎とこどもたち～

会期：2018年 1/30 (火)～2/4 (日)
時間：10:00～18:00 (※最終日2月4日(日)は16:00まで)
会場：京都府立文化芸術会館 1階展示室

昭和31年から20年以上にわたり、八戸の教育現場で中学校教諭の坂本小九郎氏と当時の生徒たちによって生み出された版画の数々。こどもたちは、地域や暮らしを見つめる目、自然や自己と対峙する力、共同制作による仲間との語らい、願いや希望を表現に託す、といった多くのことを版画を通して学びました。これらの作品は各方面で高い評価を受け、宮崎駿監督の映画「魔女の宅急便」に作品の一部が登場したことも知られています。本展では初期作品から、集大成となる「虹の上をとぶ船」の総集編と、組4メートルの大作である完結編までを一室に展示。壮大なイメージの物語が並びます。

Exhibition 3 ぼくはふたりいるんだ

～平野智之・平野智之展～

会期：2018年 1/30 (火)～3/18 (日)
時間：10:00～18:00 (月曜休館)
会場：art space co-jin

連作絵画「美保さんシリーズ」で知られる平野智之、独特の世界観で漫画とイラストを描く平野智之。それと並って過去の「共生の芸術祭」でも話題となった2作家による「ふたり展」を開催します。偶然にも同性同名となった二人の作家の感性が交差する、新しい試みの展示をお楽しみください。

EVENT

「とだのま IN 京都」

会場：イオンモール京都桂川 竹の広場
日時：2018年2月2日(金)
12:00～16:00 (休憩あり)
料金：1枚 200円
※先着順、70枚程度 (なくなり次第終了させていただきます)
「とだのま」とは、戸田雅夫(戸田さん)が営む「とだみくじ(おみくじ)」のお店。些細だけれどすこしおもしろい、優しくて時に鋭い戸田さんの言葉。「とだみくじ」あなたも一枚ひいてみませんか?

「作って遊ぶ コロコロひろば」みずのてつおワークショップ

会場：イオンモール京都桂川 竹の広場
日時：2018年2月3日(土)
11:00～16:00
料金：無料(随時参加可)
身近なものを使って転がるものを作ろう。コロコロ転がして、遠さや距離を競ったり、転がる表情の面白さを遊んだり、転がる跡が絵のようになっていたり、いろいろ工夫してどんなものができるのか作って遊ぼう。
講師：みずのてつお 協力：アートSKY塾

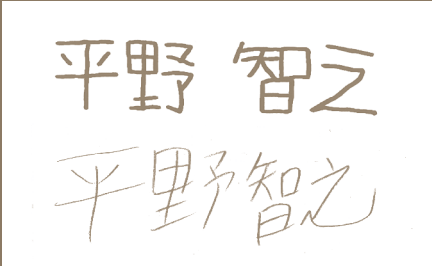
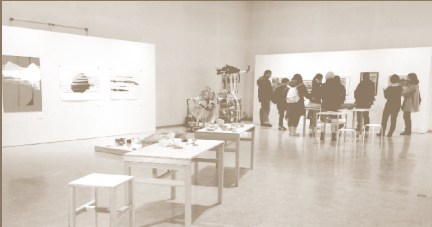
「虹の上をとぶ船 ギャラリートーク」

会場：京都府立文化芸術会館 1階展示室
日時：1月30日(火) 14:00～
2月4日(日) 11:00～
料金：無料
art space co-jinのスタッフが見てころや魅力をご紹介します。

「平野智之・平野智之のサイン会」

会場：art space co-jin
日時：2月10日(土)
14:00～(1時間程度)
料金：無料

平野智之(東京)と平野智之(兵庫)によるサイン会を開催いたします。当日会場にて配布する限定ポストカードに、二人の平野智之のサインを書いてもらえる貴重な機会です。ぜひお越しください。



Exhibition 2 Kyoto Prefectural center for Arts & Culture

虹の上をとぶ船

～八戸から届く版画の世界・坂本小九郎とこどもたち～

昭和31年から20年以上にわたり、青森県八戸市の中学校において、教諭の坂本小九郎氏の指導のもと、各校のこどもたちが制作した版画の数々をご紹介します。

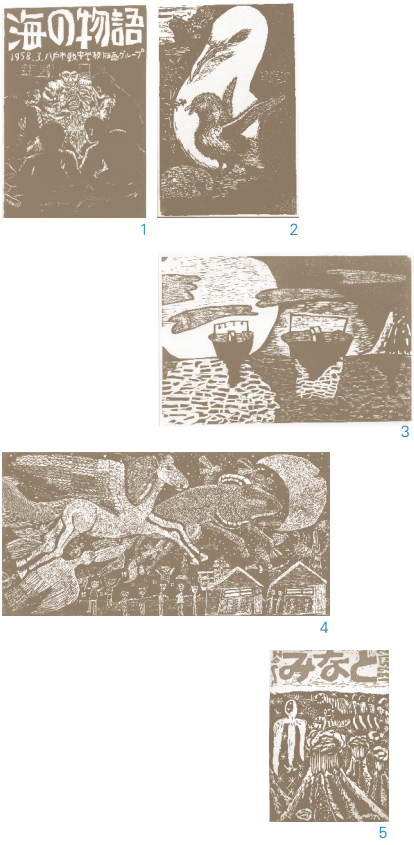
坂本氏ははじめに赴任したのは較という漁港町の中学校。駅に降り立つと鰻と魚の匂いが強く立ちまわったといいます。氏は、この港町の活気と自然豊かな地域に版画の題材を求め、こどもたちにスケッチブックと鉛筆と持たせて町を歩き、自分たちの身近にあるものを「取材」するよう指導します。こどもたちは自分たちの目で見えたものを描きとめ、感じたことを話し合い、「彫る」「刷る」などの過程を経て出来上がる版画という表現に夢中になりました。氏の指導は版画にとどまらず、読書会を開くことで、イメージから知識を深めることを促し、学期末には文集にまとめました。

このような一連の取り組みから、地域や暮らしを見つめる目、自然や自己と対峙する力、共同制作による仲間との語らい、願いや希望を表現に託すことの意味や喜びなど、多くのことを、こどもたちは学んだのです。

坂本氏は、八戸市内の中学校を5カ所転任しています。赴任先では前任の学校で制作された「版画」を指導にあたりました。日本版画協会会長大田精士氏(1909～1998)の提唱する「版画は風をのこる飛ぶ種子」という言葉通り、こどもたちが抱えたイメージが次の学校に引き継がれ、大きく膨らんでいくことになります。

これらの取り組みや作品群は、教育関係者のみならず各方面から高い評価を受け、注目を集めました。なかでも4校目の赴任先となる湊中学校の養護学級のこどもたちによる共同制作「虹の上をとぶ船」シリーズは、宮崎駿監督の映画「魔女の宅急便」に作品の一部が登場し、広く知られるきっかけになりました。

本展では、初期作品やドラゴインント、その後「船」をテーマに制作された作品が、次の赴任校にも引き継がれてゆく軌跡を、順を追って紹介します。さらに、集大成となる共同制作「虹の上をとぶ船」の総集編8作品と、幅4メートルの大作である同作の完結編までを一室に展示します。西日本では初披露となる、49点の壮大なイメージの物語—こどもたちの版画から見える地域の歴史や暮らし、願いや希望が、一人の教師によって引き継がれ結実するまで—を、どうぞ存分にご鑑賞ください。



【共同制作「虹の上をとぶ船」作品解説】

「子どもの描く絵は、どのような絵であろうとかならず意味がある。どんなに些細でつたない表現も、坂本氏は一つ一つ丁寧にすくいあげ、それが何を表しているのか聞き取りました。一人から生まれたモチーフをみんなで共有することもありました。やがて大きな版画が無数の表現で埋め尽くされ、「ちよんちゃん」の頃み重ねによって、壮大なイメージが現れます。それは養護学級のこどもたちに、自信と誇り、そして愛を認める気持ちが生まれた瞬間でもありました。「私の絵がこの版画の中になかったら、さびしくなってしまう。あの人のかいたイカも、それにサゾリモ…」(文集「みなと」より)

- 1 木版画「海物語」表紙
- 1958 | 八戸市立桜中学校生徒 | 八戸市新美術館建設推進室所蔵
- 2 「うみねこ」"ひなと親鳥"
- 八戸市立桜中学校OBはまなすの会 | 八戸市新美術館建設推進室所蔵
- 3 「船の一生」12 | 月と船と鳥
- 1972 | 八戸市立湊中学校養護学級生徒 | 八戸市新美術館建設推進室所蔵
- 4 「虹の上をとぶ船」総集編Ⅱ | "星空をペガサスと牛が飛んでいく"
- 1976 | 八戸市立湊中学校養護学級生徒後共同制作 | 八戸市新美術館建設推進室所蔵
- 5 資料展示として、坂本氏からお借りした文集や書籍も並びますので併せてご覧ください。

Exhibition 3 art space co-jin



ぼくはふたりいるんだ ～平野智之・平野智之展～

東京と神戸の離れた地を拠点とするふたりの作家は、偶然にも同性同名。本展のタイトルになっている「ぼくはふたりいるんだ」は、企画を持ちかけたときに東京の平野智之さんの口からふと発せられた言葉でした。

平野智之(クラフト工房La Mano/東京)はポップで奥行きのある構図を特徴とした連作絵画「美保さん」シリーズ、平野智之(神戸光生園/兵庫)はオリジナルストーリーによる漫画や多形イラストを発表。それぞれ過去の「共生の芸術祭」にも出展され話題となりました。今年度の新たな試みとして実現した二人展。これまではお互いの存在を知らずに続けてきた創作活動がその延長線上で交差します。

ふたりの平野智之は、不思議とどこかでつながり合っているようなストーリー性のある作品を描き出します。それらの絵は一見するとシンプルでありながら、ライン一本までも絶妙に描かれているのが分かります。大胆な構図に目を奪われたり、絵に添えられるひとりのメッセージを心に留めたりするうち、描き手の生き生きとした感性が伝わってきます。この会場でもぐり合ったふたりの共通点も探しながら、それぞれの独創的で夢のある世界をお楽しみください。

「美保さん」シリーズ「パート4」
2011 | 紙、色鉛筆、鉛筆
247x349mm

「無人版画」50p
制作年不明 | 紙にペン、色鉛筆
257x182mm

「美保さん」シリーズ「パート4」
2011 | 紙、色鉛筆、鉛筆
247x349mm

「無人版画」50p
制作年不明 | 紙にペン、色鉛筆
257x182mm

Exhibition 1 AEON MALL KYOTO KATSURAGAWA



平田猛

1936～
京都(一般財団法人 川越病院)

毎日、ベッドの上でスケッチブックに絵を描き続ける平田猛。そこには内臓と思わしき丸で構成された人体から始まり、さまざまなモチーフが描かれています。注意深く見てみると、どうやらテレビや新聞などのメディアから仕入れた情報も混ざっているようです。大量のスケッチブックに取められた膨大なドローイングは、自らの外側に溢れている情報や自身の記憶によって人体の内部をうかがい知ろうとでもしているのでしょうか。人体に描かれた線や図形は、頻りに登場する「ヒモ(紐)」や「プタ(彼は豚をプタと書く)」の延長にあるものかもしれません。私たちは自分の体でありながら、その内部を見ることはできません。見ること、知ることのできないが故に生まれる興味がこのドローイングを生み出したのではないのでしょうか。本展示では施設の協力により、実際に手にとってスケッチブックをめくることができる貴重な展示を実現しました。ぜひこの機会に平田猛の目に見える世界を体験してください。

「匿名なし」
2017 | 紙に色鉛筆
247x349mm



八島孝一

1963～
大阪(社会福祉法人 日本ヘレンケラー財団・ぶるうむ文化)

八島孝一の作品は、施設に通う途中の道端に落ちているいろいろな物を拾い集めることから始まります。そのほとんどが手のひらに乗るほど小さく、それらをセロハンテープでくっつけることによって小さな立体、「宇宙船」や「テープレコーダー」が制作されます。そのように名付けられたタイトルと立体をつなぎ合わせてみると、その中に広がる豊かな世界を想像せずにはいられません。拾い集めた物に対する八島の愛は、それを見つめるうっとりとした眼差しや物を愛でる手つきから感じることができそうです。八島は私たちが見落として、あるいは落としてしまった物を拾い、愛でることによって、その立体の中に愛に満ちた小さな物語を作り出します。立体の制作は2000年頃より行われなくなりましたが、物を集める行為は続いています。本展では施設や家族の方によって保管されていた数点の作品を展示するとともに彼が現在も日常的に続けている収集という行為に焦点を当て、創作の原点に迫っていきます。

「テープレコーダー」
制作年不明
カセットテープケース、金具類、水風船、ボールペンの筒、セロハンテープ
110x105x144mm



村田清司

1936～2015
滋賀(社会福祉法人 しがらき会 信楽青年寮)

村田清司の描く絵は、小さな宝石のよう。彼の作品を物語として構成した絵本が「世界で最も美しい絵本」(※)に選出されるなど国際的にも高く評価されています。作品の特徴として挙げられるのが「小ささ」「和紙」という要素です。はがきサイズの小さな和紙にカラフルな色が塗り分けられ、よく見るとその中に笑顔が描かれているのが分かります。その小ささゆえに「絵」を見るというよりは、小さな「物」を見ている感覚に近く、また端の整っていない和紙の物質的な側面も目立ちます。その二つの効果により、絵画でありながらも、色彩を纏った小さな立体を見つめるように私たちは感じてしまうのかもしれません。そして絵の中の笑った顔は、私たちが不思議な幸福感で満たしてくれるのです。本展ではこれらの小さな絵を含め、初期から晩年までの作品を一室に集めて展示します。施設の方々の協力によって実現したこの機会、村田作品がもつ美しさに触れてみてください。

※ドイツ「世界で最も美しい絵本」佳作受賞の絵本
『きみのこころのあじがする』え：村田清司、こ：は：田島篤三 信成社 1991年
「無題」
制作年不明 | 和紙に色鉛筆
150x105mm



濱中徹

1948～
京都

ちいさく、ささやかで、やさしい世界の中へ迷い込んだような気分になるファンタジックな作品群。ある絵には鉱石でできたラジオに耳を傾ける植物。ある絵には機械式時計の虫が飛び、またある絵にはオリジナル機能をもつカメラが描かれ、一枚一枚の絵の中でさまざまな物語が展開されます。余白が充分にとられた構図、淡い色彩の美しさ、何より驚くのは彼の描く線が定規を使わず筆によってフリーハンドで生み出されていることです。また、繊細な観察力も独自の世界を形成しています。彼自身が「道端で立ち止まって、いろいろなものを観察するのが好き。12月でも、探せば3月は春の花が見つかる。」と語るように、あえて道の途中で立ち止まり、いつものまにカ既知のものとして認識してしまいがちなこの世界を注意深く観察することから彼の描く絵は生まれています。彼が道端で立ち止まるように、絵の前に佇み、濱中徹の見るさやかな世界を感じてみてください。

「ちいさなたちの」
制作年不明 | イラストボード、水彩絵具、色鉛筆
362x515mm



川上建次

1953～
三重(特定非営利活動法人 希望の園)

荒々しいタッチの、ぎょろっと見開かれた目。大きいものでは100号の油彩を描き出す川上建次の制作拠点は三重県松阪にある施設「希望の園」。地元では「画伯」の呼び名で親しまれ、海外での評価も高い作家です。川上作品の特徴である果敢と見開かれた目は、その目の先に何かを読み解こうとする者へすぐさま飲み込んでしまうようであり、私たちはその絵の人物のように果敢と絵の前に立ち尽くしてしまふ感覚さえ覚えます。しかし、描かれているのは川上の親しい人々との出来事やそこから生まれた物語。「流血雄也」は友人の雄也くんがブッチャーと試合をして頭から血を流しているところを描いたもの。血が飛び出し、画面は真っ赤に染まっていますが、恐ろしさというより、どこかミカミルな雰囲気さえ漂っています。他の作品にもそれぞれ絵の元となる出来事があり、絵と物語が不思議なバランスで共存することで、川上の作品は絵画として強い強度を保っています。

「流血雄也」
2013 | キャンバスに油彩
130x1620mm



戸田雅夫

1958～
岡山(生活介護事業所 ぬかつくるとこ)

岡山にある生活介護事業所「ぬかつくるとこ」に通う戸田雅夫は、施設のスタッフとともにさまざまな試みを行っています。本展初日に開催する「とだのま」もその一つ、彼が営むお店で「とだみくじ」を引くことができる体験イベントです。川上作品の特徴である果敢と見開かれた目は、その目の先に何かを読み解こうとする者へすぐさま飲み込んでしまうようであり、私たちはその絵の人物のように果敢と絵の前に立ち尽くしてしまふ感覚さえ覚えます。しかし、「言葉をもたらす」とは不思議な出来事です。「とだのま」で買うことのできる言葉は手紙のように、特定の誰かに向けて書かれたものではありません。戸田がふと思った言葉が、運命のように、あなたのために言葉となり、あなたのもとへ届くのです。そこに神様はいませんか、それに代わるものを感じてしまうような、不思議な感覚に陥るのではないのでしょうか。本展ではこの体験イベントの他にも、彼のユーモア溢れる鋭い言葉の数々を展示します。

※「とだのま」は2/2(金)限りです。3(土)・4(日)はその様子を記録映像として展示します。
イベントの詳細については「EVENT」の項目をご覧ください。

「とだみくじ」
2017



国保幸宏

1974～
京都(京都市ふし学園 アトリエやっほっ!)

「チェリスト」は、チェロ奏者の揺れを大胆な構図で描いた作品です。何重にも描かれているチェリストは、その演奏を長時間享じたような時間性を内包しています。また、大きく伸びやかなタッチからは、彼がこの絵を描くときに、チェリストのような動きをしていたのではないかと想像するに難くありません。そしてこの絵には、目に見えないもう一つの時間性をおかしい、優しく時に鋭い、戸田の何気ないひと言が響かれています。しかし、「言葉をもたらす」とは不思議な出来事です。「とだのま」で買うことのできる言葉は手紙のように、特定の誰かに向けて書かれたものではありません。戸田がふと思った言葉が、運命のように、あなたのために言葉となり、あなたのもとへ届くのです。そこに神様はいませんか、それに代わるものを感じてしまうような、不思議な感覚に陥るのではないのでしょうか。本展ではこの体験イベントの他にも、彼のユーモア溢れる鋭い言葉の数々を展示します。

「チェリスト」
2015 | クレヨン、紙、アクリル絵具
545x789mm



中村清剛

1986～
兵庫

さまざまな生き物を描いて切り抜く、中村清剛。裏に書かれているのはその鳴き声です。絵の生き物を見て、どんな鳴き声を想像するのでしょうか。例えば、それが私たちの知る「猫」ならば、容易に「ニャー」と想像することができますが、それが中村の考えたオリジナルの生き物「タラコルルスオーブスパーベル」ならどんな鳴き声を想像するのでしょうか。その時、私たちは初めての生き物に出会った時に近い感覚を覚えるかもしれません。

ダブディビ・デザイン + みくくすさいだー

終伸江が運営する株式会社ダブディビ・デザインは、福祉(Welfare)とビジネス(Business)をデザイン(Design)でつなぐというコンセプトのもと、障害者アートを原画としたオリジナル商品やコラボレーション商品の企画、製造、販売を行っている会社です。自社ブランド「ダブディビ・デザイン」と、本展に出展している中村清剛も参加した「みくくすさいだー」のグッズ紹介と、併せてこれまでの製品づくりに採用されてきた原画作品の数々を展示します。

イラスト | 制作年不明 | 紙に鉛筆
バッグ | みくくすさいだー | 原画：中村清剛
協力：株式会社フジシホ、アルミング西興株式会社
参考出展：後松直子、長村良彦、山出高平

HIRANO Tomoyuki
HIRANO Tomoyuki

平野智之

1987～
東京(クラフト工房 La Mano)

代表作である「美保さん」シリーズは、所属施設の元職員をモデルとして現実と空想が入り交じる物語の世界を描いた、連作絵画作品。今回本展に出展する新作では、京都や神戸が舞台として登場。露天風呂に入ったり、巨大化したり、いつも穏やかだった美保さんが珍しく機嫌を悪くする場面も見られる。

「ヒロミ」さんの愛称で親しまれる。2011年「ポコラート 全国公募展vol.2」で中村政人賞を受賞して以降、広島・京都・新大阪・奈良・秋田・高知・新潟・岐阜からフランスまで国内外に作品を発表し、注目を集める。「共生の芸術祭」へは平成26年度出展。

平野智之

1979～
兵庫(社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団 神戸光生園)

漫画のコマ割りからベタ塗りまで、シャープペンシルと油性ペンと定規を用いて描かれ、難解なセリフも独特の味わいを醸し出す。ロゴ制作も得意とし、作品の表紙などに使用されている。本展では製本も手掛けた自作シリーズ漫画やアニメ・特撮ヒーローを思わせるデザイン画の数々に加え、プラモデル箱なども出展。

小学生の頃から宇宙一の漫画家を目指す。描き続けた作品はすべて独学によるもので、大量のスケッチから生み出されている。2015年「ハードでアートこうへ2015」に選出、2017年には第12回兵庫県障害者芸術・文化祭「美術工芸作品公募展」受賞。「共生の芸術祭」へは平成27年度出展。